かささぎ 通信 第36号

2015年7月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年六月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年10月号初出の二作品を読みました。「ハーモニカ」・「杉でつぽう」

「ハーモニカ」は、いつもは仲良しのぼくと信ちゃんが、ちょっとしたことがきっかけで仲たがいをしますが、お互いに後悔をしている様子が描かれています。森三郎は「ハーモニカ」を介して二人の気持ちが解け合う様子を、学校が引けてからその日の夕方までの短い時間の出来事にまとめています。

昼間、ちょっとしたいさかいのあと、学校で習っている「からたちの花」をぼくが歌うと「死にそうな声なんか出すない。」と信ちゃんはからかいます。しかし、夕方ぼくが家の用事で信ちゃんの家の前を通ると、信ちゃんはハーモニカで「からたちの花」を吹いています。信ちゃんはハーモニカがとても上手です。ぼくはそれに合わせて「からたちのとげはいたいよ、あをいあをい針のとげだよ。」と歌います。家の中ではそれに続くように、信ちゃんがまた続きを吹いています。うれしくなったぼくは「からたちのそばで泣いたよ、みんなみんなやさしかったよ。　からたちの花が咲いたよ、しろいしろい花が咲いたよ。」と歌いながら走って帰ります。「からたちの花」は作詞：北原白秋、作曲山田耕筰の唱歌です。もともと山田耕筰の体験を北原白秋が詩にしたもので、詩は、『赤い鳥』大正十三年七月号に載っています。「ハーモニカ」の中で引用された部分は、主人公の「ぼく」の今日一日の心持をそのまま表しているようです。

森三郎は『赤い鳥』の童謡が大好きで、白秋の詩の歌をよく歌っていたと、長女のやす子さんから伺っています。

この作品は白秋の「からたちの花」へのオマージュになっているように思えます。

「杉でつぽう」は当時の少年たちの遊びが分かるという観点からもおもしろい作品です。昼休みに教室を抜け出して、みんなで裏山へ行って杉でっぽうをこしらえます。てっぽうの押棒にする竹箸は家から持ってきてあります。みんな小刀を持っていて、ころ合いの女竹を切って杉でっぽうを作ります。それから玉にする杉の実をとりに、山へ登ります。高い杉の木に石をぶつけぶつけして杉の実を落とします。そしてみんなで分けて、ポンポンうち合いました。

杉でっぽうの作り方については、「昭和初期の子どもの遊び」（永田友市著、平成23年）にも紹介してあります。筒竹に雌竹を用いる、杉の実を玉にするのは同じです。ピストン棒には、針金、自転車の車輪の輪（スポーク）などを用いたそうです。

永田氏の本の中には「木登り」も子どもたちの遊びとして紹介してあります。「個人の庭園や屋敷内、神社やお寺の境内、その他どこでも適当な木があればそれに登って遊んだ。・・・・一般に木登りには多少の危険を伴う。小さな失敗をしながらも木登りに熟していった。」　森三郎の「杉でつぽう」でも、杉の木のかなり上の方に大きな鳥の巣があるのを見つけ、一人の子が枝から枝へ上手に足をかけて上って行きます。そんなことをしているうちに、午後の授業に遅れてしまうというところから、話しが発展していきます。

★夏休みに「森三郎童話を楽しむ会」を行います！

7月28日（火）午前10半～、午後1時半～

刈谷市中央図書館　おはなしコーナー

森三郎童話紙芝居「けいと」「目ぐすり」「おばあさん」他

小さいお子さんから大人まで、一緒に楽しめる企画です。

ぜひお出かけください。

○　次回予定　9月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年12月号初出作品　「茂作」・「五年のころ」

8月は休会です。